

JTA 第4号

弱さと自分の学問

発行日：2025年6月10日

はじめに

こんにちは、高本です。

本日は、

- ・最近の記事の振り返り
- ・弱さとは、刺激を感じ取る力のことである
- ・なぜ自分の学問なのか

という話です。

最近の記事振り返り

[6/2 「やりたいことが本当に自分がやりたいことかどうかはどう判断するのですか」【人生の軸Q&A⑥】](#)

タイトルには入りきらなかったんですが、

「やりたいことが本当に自分がやりたいことかどうかはどう判断するのですか」

「やりたいと思ったことでも途中でつまらなくなる経験はありますか」

という2つの質問への返信をまとめてます。

[6/5 日常や練習という「運動」と作品や本番は滑らかに移りあうという話](#)

これは最近割と好きな感覚なんですけど、ある種の完成物というのは連続的な運動の中にあるというもの。記事の中でも出てきますが、プロのピアニストのコンサートと子供の演奏会の違いとして、「その本番に向けて練習しているか」というのがあるっぽいんですね。

つまり、子供はその一日のために普段練習してるわけですが、プロのピアニストにとってその日は日常の通過点でしかないわけです。もちろんその一日を全く意識しないことはないでしょうけど、でも普段のピアノを弾くという手の運動が本体であって、その流れの上に一つの点としてコンサートがあるという体感。

まあプロのピアニストだったことはないんですけど想像でしかないですがw、別にピアノに限らずどんなことでもその精神というのはキーになっていて、ブログでも一つ記事書くために普段の生活があるわけじゃないですよ。その一日に向けて毎日練習して、つまりひたすら構成を考えて何回も書き直して、やっと一つ記事が出来上がるとか、本でも動画でもギターでも受験勉強でも何でもいいんですけど。そういう一つに全精力を注ぎ込むようなものは死ぬ間際にやればいいんじゃないかと思います。

別に今日一つその作品ができたところで明日はまた明日の生活が始まるわけで、僕たちは完成品を作ることが目的なのではなく、完成品につながる日々の運動が楽しいからやってるのです。毎日やるそれが面白いということが前提としてあり、だからそれを毎日やっていくと、そうするとあるタイミングでそれが一つの形を持つことがあるというだけです。

といってももちろん、本当に「ずっとやってればいつか何とかなる」というほどには適当でもありませんがw、本番のために頑張ってるわけじゃないですよ、というか本番ていつやねんって話です。それはつまりいわゆる「成功」に向けて今日を犠牲にするタイプの日常です。

そうではなく、今日のその運動が楽しいということ、だから毎日やっているということ、だからいつでも本番を迎えられるということ、そしてその運動とは何ですか、というのが人生の方向性とか軸とか言ってるやつですよ。そしてその流れに本番の一点を生み出すために情報発信を通してエネルギーを循環させていくのです。

6/8 [小林秀雄の「本居宣長」連載から考える、長く続けるために必要な固定ポイントとは](#)
最近、小林秀雄が気になってました。数学者の岡潔との対談本『人間の建設』で4、5年前ぐらいに初めて知って、その時は岡潔側が気になってたのですが、小林秀雄は「批評の神様」と言われてるらしいんですね。で、最初は「批評って言ってただ人の作品喋ってるだけやないか！」って思って全く興味なかったんですがw、もう少し見てみると何やら様子が違って、批評は一つの創作らしいのです。

『ドストエフスキイの生活』という批評本を読んだ時にちょっと異質なものを感じて、というのはドストエフスキイの人生をたどっていく形でまとめたようなものを想定してたんですが、最初の19ページまで「ドストエフスキイ」って言葉が一切出てこず（見落としてるだけの可能性もありますがw）、「時間」「空間」「歴史」の話ばかりなのです。

前振りが壮大過ぎてびっくりしたんですが、それと同時に「この人は批評というものをどのように捉えていたのだろう」ということが気になってきました。だってこんな書き方になるには相当な哲学が裏側に隠れてるとしか思えません。僕が批評と聞いて1秒足らずで思い浮かぶその批評として書くところはなりません。

というわけで、小林秀雄の批評の哲学を抽出しようと頑張ってたんですが、その時に「本居宣長」という連載をしていたことを知りました。これは文字通り本居宣長の批評で、のちの本になるのですが、11年以上の連載の原稿からできたようなのです。この『本居宣長』という本は、これまたかなり前に本居宣長が気になってた時に存在は知ってたんですが、結局読んだことはなかったの、ちょっとまたパラパラ見てみようとは思いますが、ここでの記事は、その内容と直接関係してるわけではなくて、その「11年7か月の連載」という部分に焦点を当てて、物事を長く取り組むときの強弱のつけ方について話してます。

というのは、本居宣長を批評するからと言って11年間毎日それだけをやるのは、専門で研究するような大学教授でもない限り、経済的にも飽きのきくのも難しいわけです。で、その時に大事になってくるのが、1日でも1週間でもいいが、その中に固定点を作っておくことなのではないかと。そんな話になってます。

弱さとは、刺激を感じ取る力のことである

既にある正解と自分の方法

僕は一番最初、かつてのブロガーみたいな人を見て情報発信的なことを始めました。多分僕がやってみようと思ったぐらいがちょうどギリギリの時期で、そのぐらいからはもう youtuber とか tiktoker を目指すことが叫ばれるようになっていきました。

だから、大学生のうちになんかやっておこうと思って、「ブログやるのええで！」って死ぬほど出てきた結構最後の時期だと思うのです。で、そうなるとすでにノウハウのようなものは整備されていて、正解とされているアプローチがかなり出そろっています。

始めるときは初心者なわけですから、どうやってやるのかとみていくと、いくつかの似たような情報に当然当たります。で、そういうものかと思ってそのやり方でやることになりま。しばらくするとなんか違う感じがしてくるのですが、正解とされてるのでそうやっていくものだと思っています。

その中でも僕はもうちょっと根源的な部分が気になるので、人間の心理とか認知の理解を深めて、それをいい感じに応用しようと思います。でもそれはもちろん間違いとかでもないんですが、結局ある一つの正解を目指すという方向性からは外れられてないんですね。その正解とされている手法をうまくやるための行動なのです。

でももっと自分が思うようにやってもいいと気づいていきます。科学的なこととか、誰かが勧めてるやり方とかは、別に好きに参考にすればいいんですが、それよりも自分で考えたほうが面白いのです。面白いし気持ちいいです。窮屈さが皆無です。そうなるという疑問に思うことが出てきます。

というか自分が気持ちよく一切のストレスがなく、かつ、望ましい結果、というところとのはっきりしすぎですが、思い描く画に近づくためにはどうすればいいか考えていくと、自分一人で答えが出せないことが出てきます。答えと言っても上の方で見えてきたような「こうすればいいです！」という答えではなく、「自分の中での暫定的な仮説」ぐらいでしょうか。問題が出てきて、考えてみるけどあまりしっくりこない。

で、その時に初めて本を読むわけですね。これはよく言われることですが、僕たちが悩むようなことはすでに過去の哲学者や思想家が考えてきています。もちろん文脈まで完全に同じわけではありませんが、というか、だからこそいろんな人がその問題に対してどの角度からどんな風に考えたのか、を調べていくのが面白いのです。彼らの方法やアプローチを踏まえて、「現時点の自分にとって必要と思われる考え方はこれである、だからそれを目の前の問題の解決策という抽象度に落としてきた結果として、今日はこういうことをしよう」となります。

だから今生きている人の本はほとんど読まなくていいと思ってるんですね。その人が書いたものやその手前にある問題意識は、たぶん同じことを大昔に誰かが考えてます。だからそっちを読んだ方がヒントがあります。それは長い年月忘れ去られることなく今に残ってる分、強力である可能性が高いからです。

そもそも、最近の本を書いている人も当然そういった過去の偉人や文豪のような人から影響を受けているものです。原典に返っていくほうが、少ない数でよくて、かつ普遍性もあります。

書くことについての問い

少し前にカフカとか言ってたのは、「書く」というのがどういうことか気になったんですね。ブログを書き始めてから何年か経ちますが、何を書くかという内容とは別に常に書くことそれ自体について考えることになります。慣れないうちは、一文書くことすらぎこちないわけですね。

話し言葉と書き言葉はもちろん違っていて、前者であれば、「えっと」「あの一」「～みたいな」「～な感じ」とかいくらでもいえますが、まあ普通に使ってるときもありますw、文章ではそんな言葉ばかりだと非常に読みづらいし、何というか幼稚な感じがしてきます。かといって、真面目にやりすぎると、論文みたいになりますし、行き過ぎると偉そうにもなってしまいます。

というわけで、ちょうどいいところに落ち着くまでにまずかなり時間がかかります。そもそも会話の場合は目の前に人がいますが、書くときには「これは誰に書いてるねん」ということがはっきりせずそれも苦労します。「じゃあ過去の自分に向けて」と思うと、「お前はそう考えてるからあかんねん」みたいな雰囲気になってしまいかねません。

「役に立つものでなければならぬ」と思えばガチガチに情報を伝えようとしてつまらないものになるかもしれませんし、小学生の作文ぐらい必要のない情緒たっぷり書いてしまうかもしれません。その感じがつかめて生きても、「じゃあ次は内容はどうなのか」「どうすれば読まれるのか」「そもそも読まれないといけないのか」「文章における評価とは何なのか」とかいくらでも考えられてしまうことは出てきます。

そういうのを時間をかけて実際に書きつつ考えつつして、ある程度書きたいことを書きたいように書けるようになるのですが、そういう長い長い歴史を踏まえて、改めて「書く」とはどういうことなのか、気になってきます。そしてちょっと前に本を書いたので、そのときには「通常の記事と本の違いは何なのか」ということも気になりました。ブログ記事は基本的にすべて無料で見れるわけですが、本は一つの作品として商品になります。じゃあこの違いは何なのかと。

そういうもろもろの疑問を考えようと思うと、僕が自力で考えていても納得のいく答えは見つかりません。そこで、過去の本に頼ることになります。哲学者は物を考えるのがその役目だと思いますが、考えた後は書くことになります。だから「そういった思想家がどのように本を書いたのか」は参考になります。もちろん文学などの作家の話が参考になることもあります。

それらを見ていく中でカフカのやり方が面白いと思いました。厳密にはカフカに限らないんですが、「断片と作品の両矢印の関係や両者の行ったり来たり感、どう絡み合ってるのか」みたいな部分ですね。つまり人が書いた文章はどんなときに作品と見ることができるのか。

かなり話がそれたんですが、これは何の話だったのでしょうか。そうですね、だからそんなことを考えてると、新しい本を読みたい気持ちがほぼゼロになったのです。それよりも昔の人がどう考えていたのかを知りたいし、それを踏まえて自分で考えたいし、もっと言えばそ

ういう考えているプロセス自体も、頭の中で終わらせずに言葉として形にすればそれそのものが「書く」ということにもなります。

ってなるといよいよ本を読まなくていいのです。他の誰かが書いたブログ記事やnoteなども読まなくていいのです。昔に誰かが書いたこと的一端に触れてそれをきっかけとして自分の考えが動き出し、その模様を切り取るように言葉で書き表し、それが形を伴って外に開かれ動いていく、それで十分なんです。

自分を治療する過程にある創造性

少し前に、積読についての議論がされているのを見かけたんですが、何というかどうかでもいいという感じです。それが気になる人は積読をなくしたいとか、もっといい感じに効率よく扱う考え方を知りたい、ってことなんだと思いますが、僕はあまり興味ないんですね、

で、ここも面白いところで、そんなことが気になるのって「弱さ」だと思ってます。積読の定義とか、向き合い方とか、多くの人はどうでもいいと思います。興味ないです。でもそれが気になる人もいて、それだけ繊細にならないといけないのは弱いんです。

でもだからといって、それが悪いわけではないんですね。弱いんですが、弱いからこそそのフラストレーションを解消できる方法を深く考えます。考えますし見つけようとします。それはその人の問題であり課題です。そこが工夫の機会になります。そこで生まれたアイデアは他の誰かのためになることもあるかもしれません。

そもそも積読に興味がないだけで、さっき見たように「書く」ということについてはめっちゃ興味あったわけです。積読側の人からすれば、「誰がそんな興味あんねん」って思うかもしれません。

でも僕は気になってるので本を読んだり考えたり、その過程をひっくるめて書いてみたりもします。自分で納得すればまた明日から気持ちよく書いていけます。気持ちよく書ければ止まることがありませんので、ブログの記事は無限に生まれていきます。それを読んで面白いと思う人も現れるかもしれません。

別にこんなことを考えなくても気分良く書いている人もいるでしょうし、そもそも書かなくても外で遊んでたらええやんという人もいます。僕はこの部分に関して弱いのです。この「弱い」は「繊細」ってことなんだと思いますが、つまり、刺激に敏感なのです。

普通の人が一歩でいけるところを、なんかその人に見えていないハードルがあるような気がして、「え、普通に進んだら引っ掛かりますけど？」って思ってしまうわけです。だからまあ、貧弱です。貧弱なので違和感なく進めるように自分を落ち着ける必要があります。そしてその自分を落ち着けることが、「書くことについて考える」ということなのです。

ウィトゲンシュタインは「**自分を治療するもの**」という哲学観を持っていたらしいのですが、それに近いかもしれません。みんな人それぞれ弱い部分があって、他の人が難なく進めるところで引っかかることが出てきます。それは確かに弱いのですが、でもそれが悪いわけではありません。これは無意味な慰めでもなく、本当に悪いのではないです。

しいて言うならそれを「弱い」という言葉で表現することだけが悪いのです。弱いのではなく「刺激を強く受ける」のです。だからそれを感じないようにスムーズにするために何とか頑張ります。その頑張りが工夫であり、「自分の方法を見つける」ということです。

自分で設問し解答することの繰り返しとして

冒頭の話に戻れば、すでにある正解というのは、これまでその問題を考えてきた人のやり方の寄せ集めです。その方法で望ましい結果が得られた人はいるかもしれませんが。でも刺激を感じる部分まで同じことはないので、その人が引っかからないところで疑問に思うことが出てきます。焦点の当たるポイントが違ってるといことです。

マリオで言えば、1-1をプレイした時に毎回ミスる箇所は人それぞれ違います。Bダッシュしてるときにクリボーに当たる人もいれば、パクションフラワーが出てくるのに気づかず土管を通り過ぎようとしてぶつかる人もいれば、普通に穴に落ちたりする人もいます。だから各々自分のミスリポイントに来たら、落ち着いて自分独自のクリアの仕方を見つけないといけないです。クリボーに当たる人は走るのをやめて冷静にジャンプするか、ちゃんとキノコをとればいいわけです。もっと言えば、「キノコをとればいいのか」と気づくために自分で答えを出すために本を読むわけです。もっと独創的なやり方を考えられるかもしれません。

だから弱いのは「そこを楽しむ資格がある」とも言えて、簡単に思う人からすれば素通りして終わりですが、引っ掛かるからこそどうやって進もうかと考えるのが面白いわけですね。で、いけたときに嬉しいのです。

そうやって自分の問題設定や課題を一個ずつ自分のやり方で乗り越えていくのが生きてるってことですよ。

だから自分でやろうと思えば必ず考えることになりすし、考えるのが面白くないのなら別にそれをやらなくていいのだと思います、他にも面白いことがあるはずなので。こういう問題の一つ一つがエネルギーの源泉に通じているのです。

なぜ自分の学問なのか

やっぱり自分の体験や発見や体感がベースにあるものである。

今西錦司の『自然学の提唱』にヒラタカゲロウの話が出てくる。4種類のヒラタカゲロウがある場所で棲み分けしているのを発見した。これを「種社会の発見」という言い方をしていた。リンネ以来、分類学では「種とは何か」と考えられてきたらしいんですね。何をもちて新種とするのか、区別の仕方についての定義や哲学が結論付いてないってことなのでしょう。それで分類学者はそこに頭を悩ませ続けてきた。

でも、今、4種類のヒラタカゲロウが棲み分けしていることを見つけた、つまり、この棲み分けをもって「種」というものをここに見ることができた。これは既存の生態学の枠組みでは議論できないということで、「生物社会学」というものを考えていくことになったという話がされてました。

信念は常識に引き戻されない

で、これを見て、常識とかそれまで信じられてることをはみ出ていく時には「自分が見たもの体験したもの感じたものがベースにある」のだと思ったわけです。というか、それなしで、どこかで見聞きしたことやそこから考えたことだけで現状の外に出ていくことは難し

い。常識というのはみんなが正しいと信じているもので、そこにはその分だけの力が宿っている、ちょっとした思い付きで否定したり避けたりできるものではない、揺り戻し、引き戻しの力は強力であり、そして別にすべての常識が間違いでも抗うべきものでもない。

でもそんな中で、「これだけは絶対におかしい、受け入れるわけにはいかない」というものには、明らかにそう思うに至った極めて属人的な体験があるはず。そうでもないとはみ出しきれない。「やっぱりそっちの方が正しいか」ってしぼんでいく。それに反発し続けるためには、「どう考えても絶対こうやる」という信念にまで昇華するほどの強烈な現実立ち会っていないといけない。そもそも「反発」というのも結果論で、自分の体感に素直になった結果、常識とは違う結論になったというだけ。

今の話で言えば、自分の目でヒラタカゲロウの棲み分けを見た、そしてこれを「既存の学問の中で扱わないといけない」と初めは思い、いろんな文献に当たる、でもどこにも属さない、「じゃあこれは自分で考えるしかない」という流れ。実際にその目で見た現実があるからこそ、自分で見たのだから仕方がない、自分でそう思ったのだから仕方がないとなる。

そういえば、昔大学生になりバイトをしてみようと塾講師をやってみたのですが、平均的よりは若干時給が高くて確か1500円ぐらいでした。でも、1コマ90分の授業を2コマやってみて、これで5000円弱はおかしいと思った。20歳の人間の1時間の価値が1500円なわけない。

なので、バイトはやればやるだけマイナスというのがその時出てきた答えなんですけど、でもよく聞いていたのはバイトしていっぱい遊んだほうがいいって話です。で、遊んだほうがいいのはもちろんそうですが、バイトをいっぱいするのは違う。

ということで、聞いてた話とは違うんですが、これは明らかにおかしいという強烈な臨場感があるので、僕にとってはそっちが現実ということになります。これは別に僕の価値観のただの一側面ですが、人の信念というのは、本来そういう小さな粒からできるものなんだと思います。

本を読んでそこに書いてたことで全く考え方が変わるというようなものではなく、そこに書いていたことで、自分の中にあった出来事の粒を思い出し、やっぱりそうだと、そっちを真実とする現実に移行していく。

さんざん遊びが〜とか言ってるのも小学生の時楽しかったという事実の拡張でしかなくて、だからその人やその人生にとっての真実はそれまで見たこと感じたことの中にあり、そこからボトムアップで強固になっていくものが信念で、だからこそそれは常識側に引き戻されない力を宿す。逆に同じものに触れて何も感じない時、それを受け入れる動機となる過去の体験がなかった、つまりそれに共鳴する価値観を持ってないということではない。

自分を満足させる学びの体系へ

そう、それが自分の学問をやるしかない理由になる。ここでの自分の学問は、アカデミックなものとしての文脈というよりも、**「その個人の弱みや刺激を感じる箇所から生まれる問いや好奇心に端を発する学びの体系」**のこと。つまり、それは場合によってはすでにある学問を横断するかもしれないし、別の角度から見ることもかもしれない、切り口を変えることなのかもしれない。本来学問にも始まりがあって、それは最初に始めたそいつがその方向に興味があったというだけなんだと思います。

そいつが自分自身の関心に従って突き進んだ道を後から体系としてまとめたことで「○○学」というものになり、その後は逆にその学問に興味を持った人が追従していくが、先にその学問ありきでスタートしてるので、本人の興味関心の核ど真ん中ということにはならない。

つまりそこで本来の方向からは外れていく、それに制限を書けなければいろんな分野の横断になるのは当然である。でもそこでブレーキをかけて、例えば「自分は○○学者だからこの枠から出てはいけない」と、意識に上がっていてもいなくても、そこにとどまろうとしてしまうのかもしれない。

だから自分の学問とはそれらを全部無視して、「自分の治療になり得るものすべてを扱い掘り下げの中で蓄積される何か」ということになる。散々学問という言い方をしてきたが、他に言葉を思いつかなかっただけで、辞書的な意味での学問に限らず、個人的な取り組みとそこからの学びの全てを指す。別にDIYをしてもいいし将棋をしてもよくて、「そこで得たものを持ち帰ることのできる自分のホームとしての場」を学問と呼んだ。

そこに集めた学びや体験や感情や知識を踏まえて、自分を満足させる哲学または知の体系を構築していくことが自分の学問を作るということであり、それを引っ提げて、また世界と対峙していくのです。

おわりに

今回は以上です、お疲れさまでした。
ぜひ自分の方法から学問まで作っていきましょうぞ。

次はまた10日後の予定です。
コメントや質問、感想などあれば連絡ください。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました！